

研究実施責任者	プロジェクト名	期間	配分額(円)
社会福祉学部・教授 杉原 俊二	児童養護施設卒園生のニーズ調査 ーリービングケア・アフターケア実践のための研究ー	H31 (R1)	128,000
研究概要			
<p>わが国では、少子高齢化が進んでいるにもかかわらず、社会的養護の必要な児童が相対的に増加している。高知県でも児童数は減少しているが、社会的養護の必要な児童は横ばいか微増しており、児童養護施設（以後、「施設」とする）でも定員の8割前後の児童が入所している。また、施設の卒園生（18歳を過ぎて措置解除になった人）に対して、その卒園後の支援（アフターケア）をするように定められているが、なかなか本格的に支援できないのが実情である。</p> <p>事前のリービングケア（入所中にする卒園後のための支援）とアフターケア（卒園後の支援）に関する調査で、インケア（日常生活支援）を通してリービングケアを行っており、「中学卒業時の進路選択（実際には中学1年次）から、実質的なリービングケアが始まっている」ことが分かった。また特異なものとしては『なんちゃって一人暮らし体験』（在園中に一人暮らし体験を1週間程度する）や、大学進学者への独自の奨学金などの積極的な支援を行っていることも分かった。</p> <p>本研究では、ソーシャルワーカー側からのインタビューだけでなく、卒園生側からのニーズについてインタビュー調査を行い、施設での具体的なリービングケアやアフターケアの実践につなげることが目的である。</p>			
研究成果			
<p>高知県内に8施設ある児童養護施設のうち4施設から10名のインタビューを行った。それぞれ、在園した児童養護施設と良好な関係を持っており、レジリエンスを発揮し、立派に社会人生活を送っていることが分かった。</p> <p>退所後の5年間で困ったことを確認すると、大きく「金銭関係」と「人間関係」の二つに集約できた。お金に関する教育については、在園中の「リービングケア」、退所後の「アフターケア」を通して行う必要があることが示された。</p> <p>人間関係では、「相談や愚痴を聞いてくれる人が少ない」というのが大きな悩みであり、また保証人の問題や、入院時に頼るべき親族のいない人にとっては、大きな問題であろう。</p> <p>先述のように、今回の対象者は施設との関係が良好で、退所後も施設に相談していることから、施設の卒園後の相談機能は必要であることが示された。連絡の取れる卒園生よりも連絡の取れない卒園生が多く、卒園生の横のつながりは意外と弱く、かなり意図的でなければ相互扶助のシステムを形成することが難しいことも分かってきた。つまり、施設側が卒業生を定期的に招く（集める）などの機能が必要であることも示唆された。それについては、児童家庭支援センターにアフターケアの機能を付与することを考えている。</p> <p>実際に当事者からインタビューを行うと、こちらの予想以上に多くのことが出てきたため、今後もインタビューを続ける意味はあると思う。</p>			

成 果 物 等

【学会発表】

1. 杉原俊二・宮崎正宇「児童養護施設卒園生のアフターケアの福祉ニーズ調査—リービングケア・アフターケア実践のために—」日本社会福祉学会第69回秋季大会（東北福祉大学：遠隔）
2021年9月12日
2. 杉原俊二「児童養護施設卒園生のアフターケアの福祉ニーズ調査（Ⅱ）—卒園後6年目以降の諸問題とその相談先—」日本社会福祉学会中国四国地域ブロック第53回岡山大会（ノートルダム清心女子大学）2022年7月9日